島根支部 兵教大 大学院同窓会

第12号
平成23年2月28日発行
兵庫教育大学大学院同窓会
島根支部広報部編集
題字　松本　幹彦先生
発行者　岩田　進
印刷　(有)川本印刷所

巻頭言

初心忘れず
～学習意欲の継続～

兵庫教育大学大学院同窓会
島根支部会長　岩田　進

皆様には、ますます御健勝にて御活躍のことと存じます。本年もよろしくお願いします。

一月早々、文部科学省は、「社会的・職業的な自立に必要な能力や態度を育てること。」と定義づけたキャリア教育の小中高への本格的導入を決め、十一年度に授業の指針を策定、十二年度にはモデル校を選定する計画計画で、柱は、児童生徒が職業をイメージしやすいように、企業や官公庁などでの就労体験の重視にあるようです。

これも全国で、平成九年度には一八七万人にのぼるフリーターや卒業して就職した人のうち、三年以内に離職した割合が、大卒者三十一％、高卒者四十％（厚労省）等の対策の一環と考えられています。

一　総会（益田大会）から

本年度の総会は、担当の益田ブロック（柳井秀雄ブロック長）担当で開催されました。

平成二十二年七月三十一日（土）、三好家を会場に、近年にはない数十名の参加者を得ての盛会となりました。

まず、例年通り、会長挨拶後、会務報告、会計報告があり、現在（平成十九年度院生、二十八期まで）一三九名。会費納入会員四十一名（昨年度総会終了後）、収入、支出に続いて、会費は支部長による集金。会報の発送は会員による送付との連絡がありました。これにより、支部の活動、連携の活性化、経費の節約がなされている報告がありました。

続いて、第二部の研修に入り、益田市立吉田小学校の石川勝規教諭が、「小学校教師の共感性と同僚性がバーンアウトに及ぼす影響」としての報告がありました。

そのあとの講演では、益田市の郷土史家として著名な矢富厳夫先生による「幕長戦争～石州口の戦い」が行われました。

折しも、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」が放映中で時代劇ブームの最中でしたので、大好評となりました。

この戦いで長州藩は、幕府軍に勝利し、「近代日本の夜明け」を告げたのでした。

二　全国推進協議会との連携

平成二十二年度の兵庫教育大学大学院同窓会（全国）で、「教育実践研究活動」の教育研究部門に、本会が推薦した梶谷光弘氏が「奨励賞」に選ばれ、全国総会の席上で梶田学長から直接授与されるという栄誉に輝きました。梶谷氏のこれからの御活躍を期待します。　これを励みに、「都道府県連携推進本部大学院同窓会事務局」の伊藤、高見、阿江の各氏と連絡を取り合って、発展を期して頑張っていきましょう。

三　教師教育制度の行方

教師教育は、養成－選考、採用－研修の三段階から成っていますが、このたびの民主党政権の誕生により、これらを一括して、教師の資質能力向上の方策や仕組みを抜本的、総合的に検討することを文科省は、中教審に諮問しております。

改革の基本方向は、

①新人教員の養成課程の長期化・高度化（六年間の養成課程（修士号取得が要件－教職大学院、他の大学院で）

②現職教員にも教職大学院を拡充して、資質能力の向上を図る。

これにより、普通免許状は、新人教員用の一般免許状（六年）と現職教員用の専門免許状の二種類を文部科学大臣が授与する方向です。

現職教員用の専門免許状は、八年以上の実務経験を経てのちに取得努力義務として課され、教職大学院（兵教大等）が受け皿です。

そして、その専門免許状の種類は、

○教科指導
○生活・進路指導等
○学校経営（校長・教頭に必須）

の三つです。

海外でも、教員となる際に「管理職コース」等があり、最初から最後まで、学校経営を目指すものもあります。

四　これからの同窓会のこと

今後、修了生の益々の活躍が一層期待されることは、申すまでもないが、特に、教育委員会と大学（院）との新採教員の選考や現職教員の専門免許取得の研修など、連携は密接な関係になると思われます。

こうした大学（院）との情報連絡や教科指導等の専門研究等の修了生自らの実践研究も貢献するものと思われます。

終わりになりますが、去る一月二十九日（土）には、二年ぶりに兵庫教育大学　教職大学院－教育実践高度化専攻　授業実践リーダーコースへの派遣が決まった並河智之教諭（益田市立西益田小学校）を励ます会が行われました。院生活を満喫され、御活躍を祈ります。

また、来たる二月十九日（土）には、梶田叡一前学長に感謝する会が開催されます。奮ってご参加ください。

島根支部総会
益田大会を終えて

益田支部長　柳井　秀雄

七月三十一日（土）、益田市の「三好家」において、今年度の支部総会並びに研修会が行われました。

島根県の西の端、松江市から百八十キロも離れた交通の便が悪い益田市での開催ではありましたが、総会には、益田市外から岩田会長様をはじめ、九名の参加があり、総勢二十七名で開催することができました。ご参加くださった皆様、また、ご協力いただきました本部、益田支部の皆様に心から感謝申し上げます。

さて、当日の内容については、左記の通りです。

記

【日程】　十四時三十分～二十時

一　島根支部総会

○会長あいさつ
　会長　岩田進
○事業報告並びに事業計画
○会計報告並びに予算案
○次期開　催地ブロック長あいさつ
　出雲ブロック長　加藤武行
○開催地代表挨拶
　益田ブロック長　柳井秀雄

二　研修会

①「小学校教師の共感性と同僚性がバーンアウトに及ぼす影響」
　吉田小学校　石川勝規

②「幕長戦争～石州口の戦い～」
　郷土史家　矢富厳夫

三　懇親会

研修会では、石川先生より、うつ病などの精神性疾患で休職する教師の数は年々増えている。そこで、教師の苦悩やバーンアウトの影響要因は何であるのかを質問紙調査を行い検討した。その結果、相手の感情に巻き込まれ、客観的な判断が困難な状況に陥るとバーンアウトリスクが高い。同僚性の高さは抑止力につながるとの話でした。

また、郷土史家で雪舟の郷記念館の名誉館長である矢富先生から、一時間にわたる講演をいただきました。ご講演では、四境戦争の一つである石州口の戦いが行われた益田の地を近代日本の夜明けの町として位置づけ、津和野藩と益田藩の境に位置した扇原の関門の戦いや万福寺を中心としてた益田市外における戦いの様子など、長州藩と浜田藩の攻防について、詳細に語られました。岸静江国治や大村益次郎、永井金三郎の奮戦などが熱く目に浮かぶ内容でした。

石川先生のお話は、教職現場で働いておられる多くの先生方にとって有意義なものとなりました。また、矢富先生のお話は昨年の坂本龍馬ブームの中での維新の話ということで、大変興味深い話となりました。

この会を終えて思うことは、兵庫教育大学大学院の卒業生が、年一度でも集い、情報交換や研修会を開催することによって、一層連帯意識が高まり、より絆が深まっていくことを感じました。以上簡単ですが報告とさせていただきます。

『幕長戦争　～石州口の戦い～』

雪舟の郷記念館名誉館長
矢富　巌夫

○騎兵隊の出現

今日は、明治維新の頃の江戸幕府と長州の戦いである幕長戦争について、語っていきたいと思う。幕長戦争の中、下関口、秋口大島口、益田口で四境戦争と呼ばれ、そので、もっとも熾烈を極めた石州口の戦いを話そうと思う。近代日本における夜明けの「益田」と言われたのは、結局、侍を百姓が破ったのが、益田が初めてだったからである。そして、長州側には、農民出身の大村益次郎が参謀として選ばれた。

さて、大村益次郎が、なぜ益田口の戦い参謀になったかを考えなら、見ていきましょう。

○第二次幕長戦争

慶応二年一月、幕府は長州の処分案を決し勅許を得た。しかし、これに対して長州は応ずることはなかった。このとき、すでに薩長同盟が結ばれ、長州藩は戦う覚悟を決ていた。五月、幕府は軍目付長谷川久三郎津和野藩に差し向けた。津和野藩はこれを阻止したが、その阻止策を聞き入れてもらえなかったため、津和野に滞留させた。

一方、南園隊の大隊は、処理に窮した幕側の役人を見て、これを突破し、木の峠か間道を横田に向かい、小木の河原に出た。の河原には橋がなく、軍兵が茫然としていところに、大村は「大隊、川に飛び込め」命じた。南園隊の武士は「農民出身の指令ど従われるものか」と反抗していると、大村は「おれは清末藩主利公の代理だ。命令を聞けないものは殿に反抗することになるのだと言うと、不承不承、川に飛び込んでいった。大村は「戦争に出陣する時は兵卒が異常な魄がなくては勝てるものではない」と、実前日この川の深さを密かに調べていたのでる。戦後、この川を渡って帰る時にはきちと舟橋が架けられていたので、大村の深謀配慮に感嘆したという。

○津和野藩の立場

慶應二年五月、津和野藩主亀井茲監は五十日、家臣を浜田に派遣し、軍目付が津和野にくることを阻止しようと努めた。しかし軍目付は、十四日、横田の庄屋潮郡蔵宅に泊った。さらに津和野藩では来ることの阻止に努めたが、十六日には津和野の永平寺に入られてしまった。津和野藩は以前から勤皇で知られ、長州藩とは、同じ方向を向いてた。また、小さな藩であったため、できるだけ長州藩と戦闘することを避けたかった。津和野藩には以上のような事情が当時あった。

○大村の策略

六月十六日の未明、大村益次郎は、代官のある横田をすぐ前方にしていた。しかしその間を大きな高津川が横たわっている。長州の大村は兵士を集落に休ませて、自分はその高津川の調査に出た。暑い夏の昼下がりである。大川には舟橋がかかっていてやけに舟橋は揺れていた。「この橋を渡らくても徒歩で渡れそうだ」と思った大村は師に大金十両を与えて、即刻舟橋を取り除せて、数日経た後に、再び舟橋を架けてくと依頼した。

やがて素知らぬ顔で集落に帰った大村は一軍に進軍を伝えた。軍兵が小木の河原に行くと、そこには橋がなくて大川が横たわっている。時を移さず、大村は「大隊、川に飛込め向こう岸に渡れ」と大声を出して命令した。頃は暑いので水温にはあまり抵抗はなったが、出し抜けの命令であったので、兵は不満のあまりぶつぶつ文句をならべながら渡り終えた。なぜ、大村はこんなことをしたのかというと「敵に向かって進んで行くとは、みんなが癇癪を起こすくらいでなければならない。気に緩みがあると励みがつかぬ帰りには気が緩むから水にも飛び込めぬからそれで橋を架けたのである。実は前もってこの川の深さを密かに調べたのだ」といわれた。

○大村益次郎の檄

長州軍の扇原の襲撃の知らせが津田に滞在の浜田二ノ手隊に達したのは昼下がりであった。

早速、二ノ手隊は津田西の浜に集合し遠田を通って峠山に向かった。また、遠田滞在中の浜田一ノ手隊は遠田八幡宮から浜伝いに久城八幡宮に向かい、長州兵が高津を渡って進撃中であるとの報せが入ったので今市まで押し出し、目付役の尾関金八郎に馬を打たせて峠山に陣を張っている二ノ手に連絡をとった。乙吉まで来たとき、須佐が厳しく発砲したので応戦。夕刻峠山に辿り着いて、先の一ノ手隊と合流し、さらに山兵と合同して、万福寺、椎山、勝達寺などに着陣し、戦闘体制をとった。

○浜田藩兵の油屋砲撃

翌六月十七日、朝五ツ半（午前九時）「天、炎天焼くが如し」という太陽暦では七月二十八日にあたり、もっとも暑い日である。このようにして、幕軍は長州軍のためにじりじり押され、そのために、浜田兵は福寺、医光寺の両陣に、福山兵は万福寺の山の秋葉山をいよいよ固めて布陣した。こうした間に、七尾山から響き渡る陣太鼓の音。長州軍の総攻撃が始まった。万福寺に迫った長州軍は寺の藪に潜み、小銃を発しながら福寺に迫った。この時、福山の陣から急使を浜田軍に送り「医光寺の浜田軍は寺の堂塔のから前の敵を撃ち、万福寺の浜田兵は敵の後を遮断するように」と申し出ると、浜田から「堂塔の陰から長州軍を射撃しても遠ぎて、弾を消耗するだけである。むしろ屋に火をつけて、敵の背後を遮断する方がいい」といい、福山陣ではこれに賛成した。「屋伊助宅から多くの敵兵が出入りしているこれに向かって爆弾を撃ちかけてたらどうか」と言って来たので、浜田兵も大いに賛成し椎山に大砲を据えた。大砲手が打ち出しところ、二発目の弾が油屋の酒、醤油の醸庫に命中した。このときに大村は「戦は天のためである。地民をくるしめるな」といって、一時休戦して消火につとめたので、村は感謝し、民心も長州側に集まった。長州精鋭隊が三宅の土手を突破し万福寺の門前迫ったとき浜田兵の反撃にあった。

○永井金三郎の奮戦

大村は妙技寺を野戦病院として兵卒をいたわり、地元民慰撫への配慮も怠らなかった。

一時、長州兵は苦戦したが油屋の鎮火の恩として村人は酒や湯水を供し、兵糧、武の運搬などに、努めたために長州兵の士気は大いに揚がった。浜田の隊長は、万福寺の屋根に上がり、仁王立ちになって指揮を始めた。そして、長州兵の状況がわかると急いで降ると、槍隊を率いて三宅の土手の長州兵に向かって、一目散に突進した。待機していた兵たちすべてが隊長の後に続いた。こうした隊の奮闘に、度肝を抜かれた長州兵は、一潰れて退却した。

○大村益次郎の作戦

大村は「窮鼠は反って猫をかむ」といった。一の隊を街道の側の麻畑に伏せさせて、正面からの攻撃軍を退却させた。それは、この益田は友軍の須佐隊の故郷でもあったし、火をさけたいという約束から最初から万福寺を砲撃する考えは無かった。さらに、浜田兵を寺中に閉じ込めておいて、周囲から激しく攻撃すると、かえって彼らは寺に放火して自刃するおそれがあるとして、赤門を逃げ口に空けておいたのであった。したがって、浜田兵万福寺に孤立状態になった時、浜田兵は、福寺の赤門を押し開き、捨て身の戦法で突撃してきたのである。浜田兵が退散して片山道を敗走すると、さきの長州兵が麻畑から斉射撃を始めたので、浜田兵は民家に火を放って、雪崩を打って敗走した。

兵教大大学院益田支部総会講演会より
著著　幕長戦争～石州口の戦い～より

小学校教師の共感性と同僚性がバーンアウトに及ぼす影響

益田市立吉田小学校
石川　勝規

うつ病などの精神性疾患で休職した教師数は、十五年連続で増加している。このような状況の中、教師の苦悩やバーンアウトに関心を向けようという動きが高まっている。教師のメンタルヘルスを守るためにも、バーンアウトに影響を及ぼす要因を研究することは意義深いと考える。本研究では、小学校の教師に焦点をあて、個人特性である共感性の水準と職場の人間関係が教師のバーンアウトに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

そして、共感性が高いと情緒的に消耗をし低いと達成感の後退は高まることが示されたまた、同僚性が高いと達成感の後退は低いことが分かった。さらに、共感性・同僚性とに高い人は、達成感は感じつつも、消耗感が高まり、バーンアウト傾向を示すことが明らかになった。

共感性は、高くても低くてもバーンアウトにつながるリスクが高くなる傾向があることが示された。共感性のどの部分が影響を及すか検討したところ、「緊急時の混乱」が有意に影響を与えていた。緊急事態において混乱するのはなく、冷静に判断できる力が教師には必要であり、客観的に対応できる力を身につけていく必要がある。

共感性は教師にとって重要な資質の一つであるが、相手の感情に巻き込まれ、客観的判断が困難な状況に陥ることでバーンアウトリスクを高めてしまうのではないかと推される。一方、人との結びつきを求める同僚性の高さは、ソーシャルサポートを得る可能性があり、困難時には相談できる職場の同僚がいることがバーンアウトへの抑止力になることが示唆された。「共感性」と「同性」はバーンアウトにおいて重要な影響因であることが示された。

支部紹介シリーズ6

出雲支部の紹介と活動

出雲支部長　加藤　武行

出雲支部は、県本部から会員名簿が配布されていた頃は、会員数や所属を掌握できていましたが、現在は個人情報保護強化により、全く把握できていない状況で、同窓生無縁社会に陥っています。支部総会即支部役員会と言ったところです。

さてこの度、今年の島根支部総会をこの弱体化した出雲支部がお世話しなければならないという大変な試練に直面してしまいました。しかし、せっかくの遠来の皆さんに満足して頂くよう、役員一同知恵を出し合って、次のような計画を立てることができました。

期日　二〇一一年七月三〇日(土)

会場　出雲弥生の森博物館：研修室
(出雲市大津町)

日程概要

一三・三〇　受付
一四・〇〇　島根県支部総会
一四・三〇　研修会
①出雲地方での弥生人の暮らし
(施設見学と講義)
講師：弥生の森博物館学芸員
②国内最古の石器発見
(砂原遺跡発見の意義)
講師：兵庫教育大学名誉教授
成瀬敏郎先生
③会員研究報告
手銭俊夫神戸川小教諭
梶谷光弘斐川西中校長
一七・四〇　記念撮影
(会場移動)
一八・〇〇　懇親会
(会場：出雲市駅前「神門」)

今回の研修会のメインは、何といっても出雲市出身で、現出雲市在住の成瀬兵庫教育大学名誉教授による、マスコミでも大きく取り上げられた日本最古の旧石器発見についての講演です。勿論先生には、懇親会にも同席して頂く予定です。是非、ご参加ください。

さて、出雲支部での活動については、前回の総会でも紹介しましたが、出雲支部を別名「教育実践研究の会」と名付けて、個々の教育実践の成果や理論についての知見を持ち寄って相互に研鑽を深めていくことを活動のコアにしました。そして、持ち寄った知見を「教育の知恵袋」「教育理論と実践に関する知見集」としてまとめ、それをもとに教育行政に積極的に提言したり、学校現場にも情報提供をして教育の質的向上に貢献しようと試みました。しかし、残念ながら現政権と同様、リーダーシップや実行力が伴わず現在のところ休業状態のままです。

昨今、ドラッカーの『マネジメント』がベストセラーになっていますが、高校野球の女子マネジャーばかりでなく、今の教育界でもこの本に書かれているアイデアは大変示唆に富むように思えます。現在の子どもたちの育ちをみると彼の言うイノベーションが教育において最も必要とされていると考えます。私たちは唯一「教育理論と実践の研究」を目標に掲げた大学院で専門的に研修させていただいたわけですから、課題解決につながる質の高い智慧を発信してこそ私たちの存在価値があるように思います。同時にそれは、兵教大大学院同窓会のレゾン・デートルでもあります。

出雲支部のいま一つの問題は、老化が進行した旧石器時代の支部長が居座り続けている点です。出雲支部には有能な人材が豊富であるにもかかわらず、様々な事情から世代交代が行われていません。

七月の島根大会後からは、フレッシュな新支部長のもとで「NPO法人教育実践研究の会」編著「教育の知恵袋」が出版され、ベストセラーになったという私の今年の初夢が、実現するよう切に願っているところです。

何はともあれ、七月三〇日には是非とも出雲市へ！

シリーズ4『あれから』

★転機となった兵庫教育大学での二年間

(第一期　修了生)
山根　明人

昭和五十五年四月から、二年間、兵庫教育大学大学院で学校教育研究科修士課程社会系コース地理学専攻として、学ばせていただきました。

この二年間は、私が教職を全うする上で非常に重要な期間であり、教員として大きな転機となったものと考えている。退職前に、島根県小学校長会で毎年出版されている「校長樹林」にその思いを記しているので、ここに転記しておきたい。

「(前略)島根県の小学校教員として採用されたのが、昭和四十七年四月であった。それから、三十有余年、教えた人たち、同僚の先生、管理職の先生、保護者、地域の方々、いろいろな人のお世話になったり、ご迷惑やご心配をかけたりして何とか教職を全うできようとしている。

私が教師としてやってこられたのは、前述の人たちのおかげと次にあげる研修等の機会が与えられたからできたのではないかと考えている。

一つは、兵庫教育大学への内地留学という研修であろう。

大学時代は、弓道にのぼせており、また、大学紛争で半年も授業がなかったということもあり、ほとんど勉強せずに教職に就いたのである。教師として、また人間として大変に未熟であり、自信もなく、毎日を漫然と過ごしていたように考えている。

それ故、できればもう一度、勉強し直したいと常々思っていた。そうした時、たしか出身の大田市内へ転勤して、ある飲み会でのことである。勤務校ではない他校のN校長より、今度、新構想の大学院ができ、身分はそのままで勉強できる制度があるが行ってみないか、と興味深い話を聞かせてもらった。行きたいという旨をその場で述べたら、N校長より大田市の教育長に話をされ、勤務校のM校長にその話が行き、県よりの推薦となったようである。そこで、思い切って受験させてもらうことにした。たまたま、私の受験したのは、社会系コースで、それも地理学専攻ということで、倍率もそう高くなく、運良く合格することができたのである。昭和五十五年四月より、一期生として学ぶことができた。

この内地留学によって、教育現場を離れて、外から学校を見つめ直すというかけがえのない機会を与えていただいたのである。

学問の厳しさも教えてもらった。本の読み方、本の探し方、論文やレポートの書き方等、少しわかるようになったように思う。私の場合は、どちらかというと地理学という学問へのアプローチが主であったが、教材化の基礎となる研究として、追究したように思う。社会科の教材開発のために、現場に帰ってから大いに役立ったと考えている。

全国から内地留学している現職の教員である院生から学ぶことも多かった。院生の方々と、時には議論したり、時には寮の院生たちで大学のある社町の運動会に参加したり、気の

あったもので史跡探訪や懇親会等のレクリエーションをしたり、等々様々なことを通して知り合いとなり生涯の友を得たようにも思う。

教師に求められるものを大きく分ければ、専門的力量と人格的魅力、といわれる（齋藤孝「教育力」より）。この内地留学を通して、この二つが少しずつ深まったり、広がったりしてきたようにも感じ取られた。（後略）」

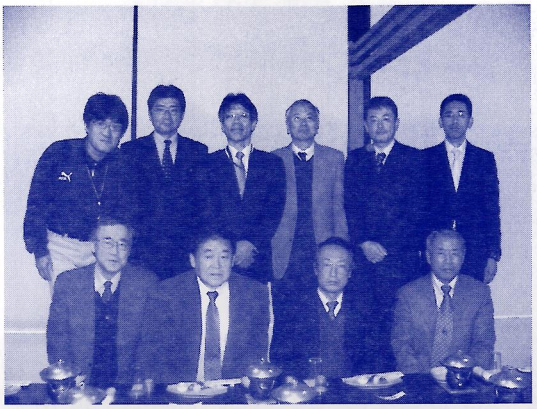
以上のように、振り返ってみれば言葉では言い尽くせないすばらしい二年間であった。

大学院修了後、現場に戻ったわけであるが、二年間学ばせていただいたことを、学校教育に少しでも生かせればという思いで微力ながら勤務させてもらった。

また、同窓の方々といろいろな面でご指導ご支援をいただく機会があり、それもまた私の大きな財産になっている。

平成二十二年三月に退職した現在、この貴重な二年間を与えていただいた方々に感謝の気持ちが一層強まっているところである。

兵教大大学院同窓会「御退職を記念する会」



平成二十一年十一月二十日（土）に松江ニューアーバンホテルを会場に「御退職を記念する会」を行いました。

山根先生は、浜田ブロック長をリードして頂き、同窓会を盛り上げて頂きました。先生は昭和五十五年四月に第1回大学院入学されました。当日は、当時の社の町並みや大学院時代の研究について、楽しく語って頂きました。また、趣味であるバイク（愛車BMW・R100RS）の話やツーリングの話など、とても興味深い話でした。私たちは、先生と話すことにより、元気をもらいました。

今後とも教育、そして同窓会にも参加して頂き、趣味であるバイクの話など多方面での御活躍の御経験を活かして頂き、御指導・御鞭撻をよろしくお願いしますと、なごやかな会になりました

兵教大大学院留学 平成二十三年度 派遣教員を励ます会

平成二十三年一月二十九日（土）に、サンランポーむらくもを会場に「兵庫教育大学大学院派遣教員を励ます会」を行いました。平成二十三年度派遣教員は、並河智之（なびか　ともゆき）教諭です。益田市立西益田小学校に勤務しています。励ます会は、来賓に島根県教育庁義務教育課より村木隆夫先生にお越しいただき、楽しく過ごすことができました。並河先生は、授業実践リーダーコースを志望しておられました。そして、テーマについては、国語科　PISA型読解力については、「国語科で子どもが一人読みで文章を正確に読解するための読みの技法」ということでした。二年ぶりの派遣に、修了生は、熱く応援し、並河先生に兵教大での過ごし方や楽しみ方を語りました。この励ます会が、来年度も続くように、修了生は頑張っていこうと、改めて心に誓った会にもなりました。

梶田叡一（前・兵庫教育大学学長）を囲む会

平成二十三年二月十九日（土）に、松江市かねやす食堂を会場に「梶田先生を囲む会」を行いました。

本会は、兵庫教育大学大学院同窓会島根支部へのこれまでの御指導に対しまして、精一杯の感謝の気持ちを込めて企画された会でした。

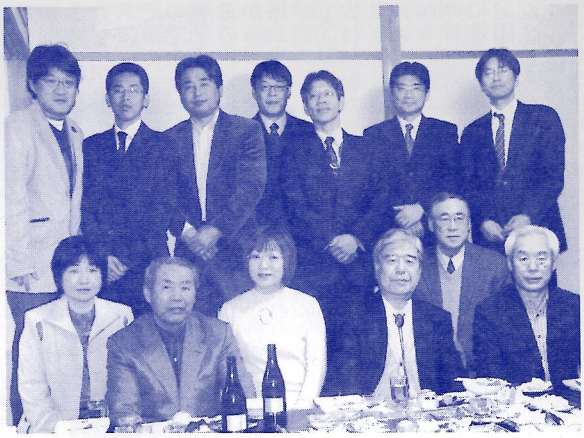
梶田先生は、昨年兵庫教育大学学長を御勇退されました。現在は、岡山県の環太平洋大学学長をなさっています。お話から、とても充実した日々を送っておられる様子が伺えました。

会の初めには、

○環太平洋大学の様子
○今後の全国学力調査の方針
○教職員免許更新制度の意味
○新学習指導要領の話
○日本教育の今後の在り方　など、

とても興味津々なお話をしてくださいました。梶田先生のお話を聞いたり、質問をしていると、出席者一同が、「よし、明日から頑張るぞ」という気持ちになります。きっと先生の世界に引き込まれ、そこが居心地の良い空間であり、その中で真剣に考えるべき課題が見えてくるように思いました。最後に梶田先生が「日本は資源のない国である。人間しかいない。だから、教育が大切だということを現場の先生にわかってもらいたい。今、踏ん張って欲しい。」と激励を頂きました。梶田先生、本当に有り難うございました。

今後とも兵教大同窓会島根支部への御指導・御鞭撻をよろしくお願いします。



編集後記

今回の会報の発行にあたりまして、お忙しい中、原稿を提供して頂いた会員の皆様に感謝します。ありがとうございました。今年度の支部総会は、紙面の紹介とおり出雲ブロックです。ご参加をよろしくお願いします。

益田支部総会では、大変勉強させて頂きました。ブロック長の柳井先生や事務局の先生方にも大変お世話になりました。なかなか専門性が高く、講演内容など、一部になってしまったことをお詫びしたいと思います。

さて、今回の広報には、活発な同窓会の活動が掲載できたように思います。修了生の皆様とますますの交流ができればよいと考えております。

同窓会の原稿や会費のことで問い合わせが必要な場合は、左記まで、ご連絡ください。

斐川町立斐川西中学校　岡田　昭彦